

尾張北部における古代の開発をめぐる様相

—古代の門間沼遺跡と周辺—

小川芳範

1. はじめに

門間沼遺跡では南北に長いトレンチ状の調査であったが、弥生時代中期、古墳時代前期、同中期、古代（飛鳥時代を含む）、中世、近世の遺構・遺物が検出され、門間沼遺跡の北東方向への広がりが確認できた。古墳時代前期には、北東に位置する大毛池田遺跡へと続く水田の広がりが確認できた。さらに、古代では大毛池田遺跡に加えて大毛沖遺跡を併せた空間内の景観復元を可能にした。

門間沼遺跡周辺の微高地上には大毛池田遺跡・大毛沖遺跡の他に、北道手・田所遺跡、伊富利部古墳、門間古墳、門間遺跡、瓦ヶ野遺跡、前田遺跡、福塚前遺跡、稻荷山古墳、石刀古墳、上町屋古墳、西宮社古墳、でんやま古墳、野見神社古墳、車塚古墳、神戸廃寺などが存在する。

門間沼遺跡周辺は、東海北陸自動車道の建設に伴う本センターの発掘調査により、古墳時代後期から飛鳥時代の墓域と集落が広範囲に確認された。また、飛鳥時代以降律令時代には、大毛池田遺跡から続くものと想定される大溝群が確認でき、周辺からは美濃刻印須恵器をはじめ良好な文字資料が得られた。

古代開発行為の様相に迫るには、まず遺物の出土を知ることと考える。本論は、門間沼遺跡等の成果から葉栗郡周辺における開発の様相を模索してみる。内容は二部構成とし、第一は、周辺地域の開発行為の証しとして、一宮市今伊勢町馬寄所在の石刀神社所蔵の古墳出土遺物（石刀古墳・上町屋古墳・西宮社古墳）を検討し、古墳時代後期以降の開発行為の時期を考える。第二は、古代の文字資料に焦点をあて、尾張北部出土の墨書土器を中心とした資料の集成をした。遺跡は開発の証しとの考えにたって、本論はその時々の開発の様相

に迫る。

2. 古代開発の画期

石刀古墳・上町屋古墳・西宮社古墳は一宮市今伊勢町馬寄に所在する後期古墳である。資料は伊勢湾台風等により遺物が露出した際等に発掘されたものである。

資料（図2）は僅か20点であるが、今伊勢古墳群という地域の開発という視点で遺物を観察すると、大きく3つの画期の存在に気づく。まず5世紀末～6世紀初頭の第Ⅰ期、6世紀末～7世紀初頭の第Ⅱ期、7世紀後半～8世紀前半の第Ⅲ期である。また、古墳から古瀬戸の四耳壺の出土を見ると、各地に存在した中世の塚信仰が窺える。

門間沼遺跡周辺について論ずると、門間沼遺跡94調査区で確認された円墳群は、古くは5世紀代に遡るものもありまさに第Ⅰ期の開発行為である。5世紀後半から末にかけては、葉栗郡に凡海部・敢石部・石作部・穴太部・伊富利部などの部が設置、尾張連が尾張国造に任せられた時期でもあり、この地域の開発行為に何らかの因果関係を思われる。また、大毛池田遺跡でも確實なものは1基だが7世紀半ば頃の円墳が確認され、周辺に古墳の存在も想定できる。これは、第Ⅱ・Ⅲ期の開発に値する。古墳の築造という視点でみると、今伊勢古墳群、及びその北方に位置する門間沼遺跡周辺の開発には、同様の画期が存在するようである。

葉栗郡全体に視野を広げると、第Ⅰ期に該当する時期には、浅井北古墳群の毛無塚古墳が造営される。第Ⅱ期には同古墳群の小塞神社古墳が、浅井南古墳群の塙竈神社古墳が造営されている。その後の第Ⅲ期には、爆発的に古墳が造営されて50基ほど存在した。

第Ⅲ期の葉栗郡内は全国各地同様、古代寺院の建立も確認できる。壬申の乱による国家規模の大変革が生じた7

世紀には、遺跡の様相が大きな転機を迎える。地方に焦点を絞れば、豪族主体の開発を含む経営体制から、プレ律令体制への転換である。古代寺院の建立と、この周辺に群衆並びに豪族等支配者層の居館を構えたものが一例といえる。葉栗郡も例外ではないと考えられるが、寺院周辺地域の様相は明確には把握できていない。ただ黒岩廃寺の周辺からは蹄脚硯が出土するなど官衙の存在を窺わせている。

7世紀代から奈良時代の建立とされる古代寺院は、一宮市浅井町の黒岩廃寺、江南市村久野の音楽寺、現岐阜県笠松町の東流廃寺が存在する。黒岩廃寺の建立者は、『塵袋』に収録されている葉栗臣人麿の建立した葉栗尼寺（光明寺）に比定する説と、村国氏とする説がある。出土している軒丸瓦は、外区に面違鋸歯文をもつ川原寺式の複弁蓮華文のものである。尾張には稀な川原寺式軒丸瓦をもつこの寺院の建立者は、美濃に川原寺式軒丸瓦をもつ寺院が多いことから考えて、美濃国により一層関わりを持つ人物の建立と考える。音楽寺は、壬申の乱で功績のあった村国氏の建立といわれている。村国男依は身毛君広（むげつきみひろ）・和珥部臣君手（わにべのおみきみて）とともに、壬申の乱で大海人皇子方で功績をあげた氏族の1つである。彼らは国家体制整備の一翼を担い、各地に本願地を構えたと思われる。美濃国各務郡村国郷を本願地とした村国氏は、木曾川を挟んで対岸の葉栗郡も管領下としていた。音楽寺建立に代表されるように、壬申の乱後経営基盤整備に一層取り組んだのであろう。また、現在は岐阜県笠松町であるが、当時は葉栗郡域とされる地に東流廃寺が存在する。採集されている重弧文軒平瓦や単弁軒丸瓦が、渡来系氏族寺院特有の軒丸瓦（湖東式）であり、渡来系氏族に関わる階層による建立の可能性がある。

* 石刀神社所蔵遺物の時期・産地等について
は、渡辺博人氏（各務原市教育委員会）・藤澤
良祐氏（財団法人瀬戸市埋蔵文化財セン
ター）にご教示いただいた。

** 墨書土器をはじめ文字資料の判読について
は、平川南氏（国立歴史民族博物館）・早川万
年氏（岐阜大学）にご教示いただいた。



図1
古代開連遺跡

1. 門間遺跡
2. 大毛池田遺跡
3. 大毛沖遺跡
4. 北遺跡
5. 東流原寺
6. 王の井先木曾川中州
7. 木曾川水没遺跡
8. 伊富利部古墳
9. 瓦ヶ野遺跡
10. 門間古墳
11. 門間遺跡
12. 前田遺跡
13. 福塚前遺跡
14. 福荷山古墳
15. 石刀古墳
16. 西上免遺跡
17. 中切遺跡
18. 上町屋古墳
19. 西宮古墳
20. 車塚古墳
21. 神戸塚寺
22. でんやま古墳
23. 野見神社古墳
24. 伝治越遺跡
25. 27. 八王子遺跡
28. 田島遺跡
29. 氏神東遺跡
30. 東出野立遺跡
31. 東高見遺跡
32. 奥屋敷遺跡
33. 津井北古墳群
34. 清瀬遺跡
35. 大塚遺跡
36. 腹塚古墳
37. 富塚古墳
38. 浅井神社古墳
39. 宮前遺跡
40. 堂浦遺跡
41. 高畠遺跡
42. 馬見塚遺跡
43. 後飛保新開遺跡
44. 常田貝壳
45. 音楽寺
46. 村久野寺前
47. 桐野遺跡
48. 木曾東町新塚
49. 長福寺塚寺
50. 円長寺古墳
51. 一宮南高校平公遺跡
52. 鹿取遺跡
53. 塩竈神社古墳
54. 黒岩塚寺

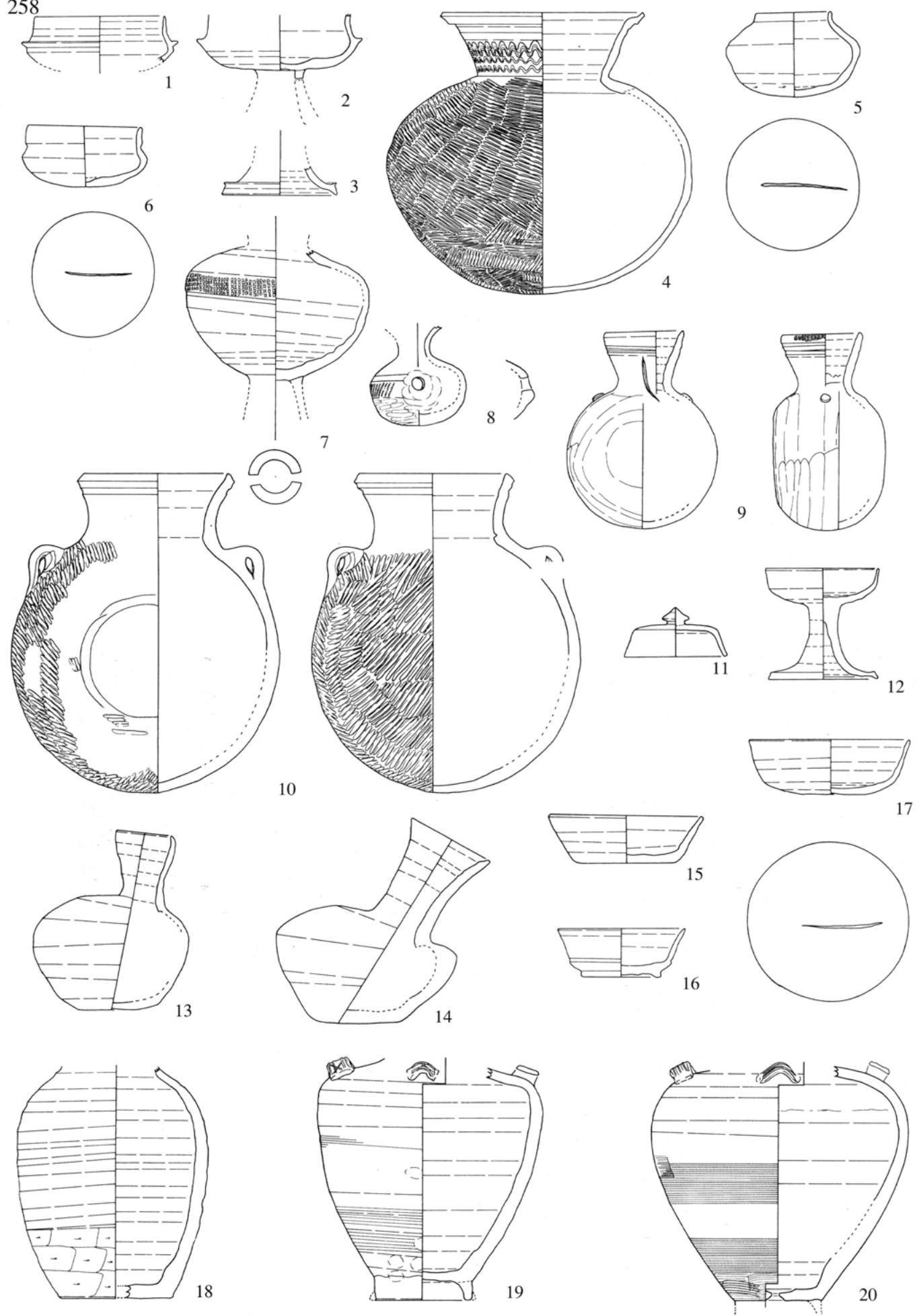


図2 石刀神社所蔵遺物

このように、地方において官衙的色彩を有するものは様相がある程度把握できるが、門間沼遺跡周辺から渡来系氏族が関わっていた等の証しは確認できていない。第Ⅲ期には居住域西群・中央群・北群が営まれ、大溝群が掘削される。この頃造営の盛期を迎える浅井北古墳群もまた、その墳墓構造等に渡来系氏族との関わりが指摘されていない。ただ、門間沼遺跡周辺だけでなく浅井北古墳群も含む葉栗郡をはじめ尾張北部全域が開発の第Ⅲ期を迎えていたこ

とは間違いないだろう。

このような状況から、古墳時代後期から飛鳥時代の開発には3つの画期が存在する。その時々に何らかの国家的規制等が働き、開発推進に至ったと推察する。

3. 奈良・平安時代の様相

尾張北部出土の文字資料等の集成

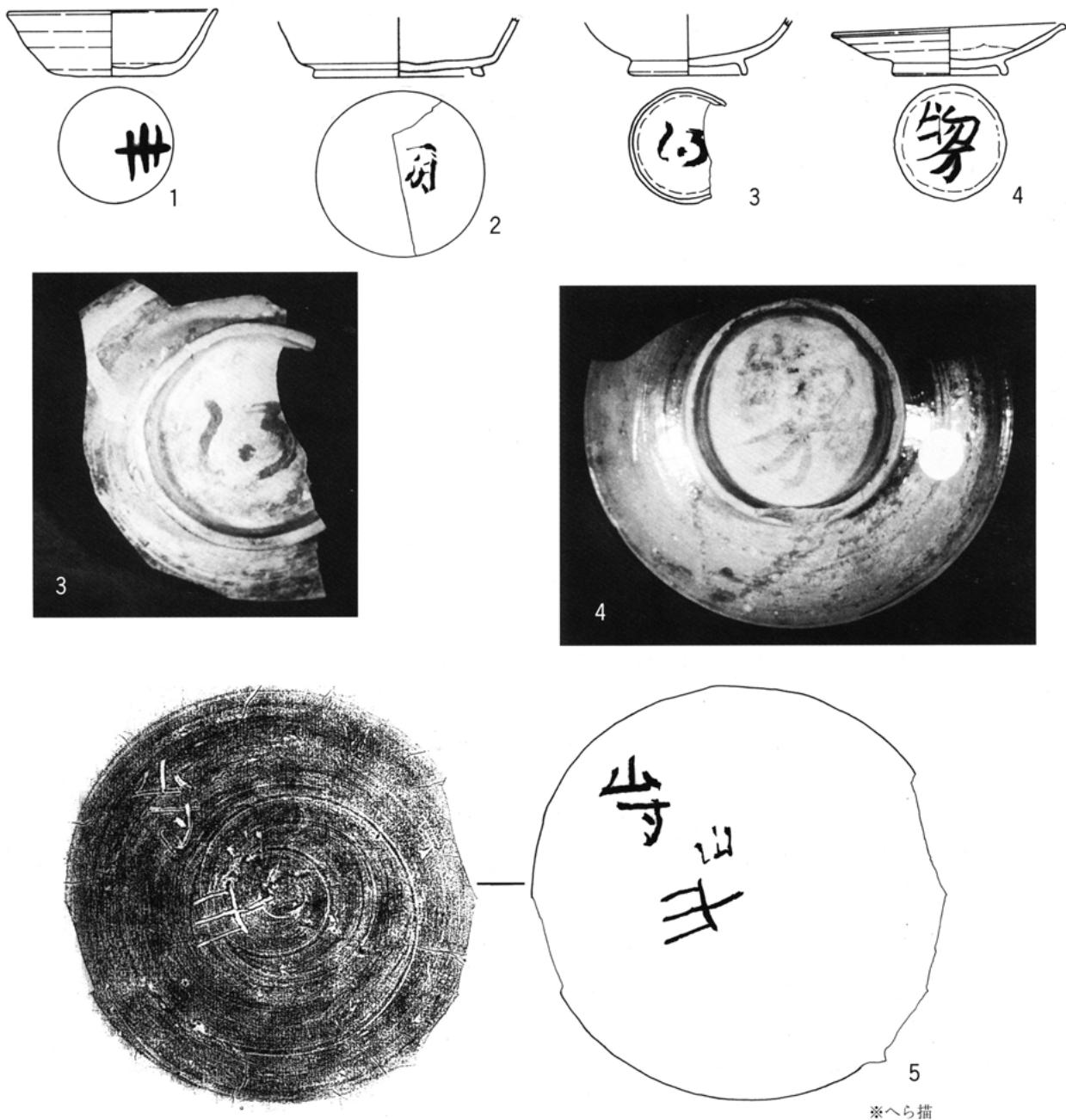
大毛池田遺跡94A区・94C区の2条の大溝（溝F・溝E）から美濃刻印須恵器の出土をはじめ、門間沼遺跡周辺では

墨書き土器に恵まれた。そこで、各地で進行中の文字資料集成の一役でも担えたとの思いで、尾張地方北部の資料を集成することとした。墨書き土器等の研究は、今や各地で盛んに行われている。ところが、遺跡の性格や時期別さらに分布状態等の検討を経ることなく墨書き内容の分類に力点が置かれすぎているとの反省に従って、まずは文字資料の有無の調査から手懸けた。

愛知県埋蔵文化財センターが、調査

*平川 南ほか 1989 「古代集落と墨書き土器—千葉県八千代市村上の内遺跡の場合」[「国立歴史民俗博物館研究報告第22集」]。

図3 各種墨書き土器（1：大毛池田、2～4：大毛沖、5：門間沼）



※へら描

を実施した古代葉栗郡域の5遺跡から墨書土器102点、刻印土器3点、刻書土器1点が出土している。墨書土器は、須恵器が主体の門間沼遺跡・大毛池田遺跡と灰釉陶器が主体の大毛沖遺跡と田所遺跡とに2分できる。また、器種別の頻度では門間沼・大毛池田遺跡では須恵器の杯42.1%、灰釉陶器碗26.3%が主体を占める。また、大毛沖・田所遺跡では灰釉陶器碗53.3%・同皿13.3%が主体を占める。墨書内容は数字も含めた文字が大半である。墨書内容では、門間沼遺跡の資料に多くの「田」の字が存在する。(全37点中16点) また墨書土器出土遺構では、平安時代の井戸からまとまって出土している。この中に、灰釉陶器碗の底部外面に則天文字「瓦」が書かれたもの2点が出土している。さらに、綠釉陶器の素地と思われる碗等にも墨書が存在する。大毛沖遺跡の墨書内容には、「公」「金」の字が各々2割程度存在する。また、特筆すべきものに旧流路から灰釉陶器碗の墨書土器がある。これは、底部外面に中国居延漢簡の字体にある“(・)”が書かれている。“(・)”は人名か官署名を意味するものか。今後の課題となろう。これら墨書土器出現は大別して2時期あり、それは8世紀末～9世紀前葉と9世紀後葉～10世紀前半である。

墨書土器は、木曾川町資料館と一宮博物館所蔵の資料も調査し、全33点をまとめた。出土地域では、門間遺跡周辺が最も多く次いで浅井古墳群周辺である。器種別の頻度では、66.7%が灰釉陶器である。時期の中心は9世紀後葉～10世紀代である。

以上のことから尾張北部における識字層の広がりは、第一波は8世紀末から9世紀前葉に訪れ、第二波は9世紀後葉から10世紀代に訪れていることが判る。このような時期に集落(遺跡)の増加・拡大が進んだと考えられよう。

刻書土器についても門間沼遺跡と併

せて、一宮博物館所蔵資料の調査を実施した。この資料の中に、一宮市史には判読の断定がされていない須恵器の小型高杯(図5・34)があり、脚部内面に「奈」と記されている。時期は7世紀末であり、文字の書体そのものも奈の示の部分が突き抜ける形である。

門間沼遺跡の刻書土器では、須恵器無台杯(図3・5)の底部外面に「山寸」と書かれている。他にも山と書こうとして下に突き抜けたものか、記号か?のものと山一字がかされたような部分がある。この刻書「山寸」須恵器は生産窯が小牧市篠岡78号窯であり、時期も7世紀後半から末に比定されている。この土器の出土した門間沼遺跡95C区では美濃刻印須恵器も併せて出土している。7世紀代までは須恵器の产地が尾張産と美濃須衛産の量的な差があまり感じないが、8世紀に入ると美濃須衛産が尾張産を圧倒する。律令体制整備に尽くした美濃国司笠朝臣麻呂が、窯業生産を官営化し生産拡大を計ったため、周辺地域への流通量の増大につながったと言える。

村国氏の管領地に組み込まれるなど、美濃国と関係の深かった葉栗郡は8世紀に入ると、国家政策を地方政治に移した美濃国司笠朝臣麻呂の施策もあり、遺跡の様相に影響が現れる。開発の第Ⅲ期に当たる7世紀後半から8世紀前半の時期は、律令体制を整えるために国家あるいは地方が主導となって実行した施策の1つ1つが地域の開発に如実に現れていると言えよう。

最後に、門間沼遺跡と大毛池田遺跡で確認された大溝群は、開削は7世紀中葉と7世紀後葉～末に行われている。大土木工事である大溝群掘削の指導者は、如何なる人物であったろうか。渡来系氏族関係か、笠朝臣麻呂に代表される地方行政官か、いずれにせよ美濃国とは密接な関わりを持つ人物によって指揮された事業であろう。

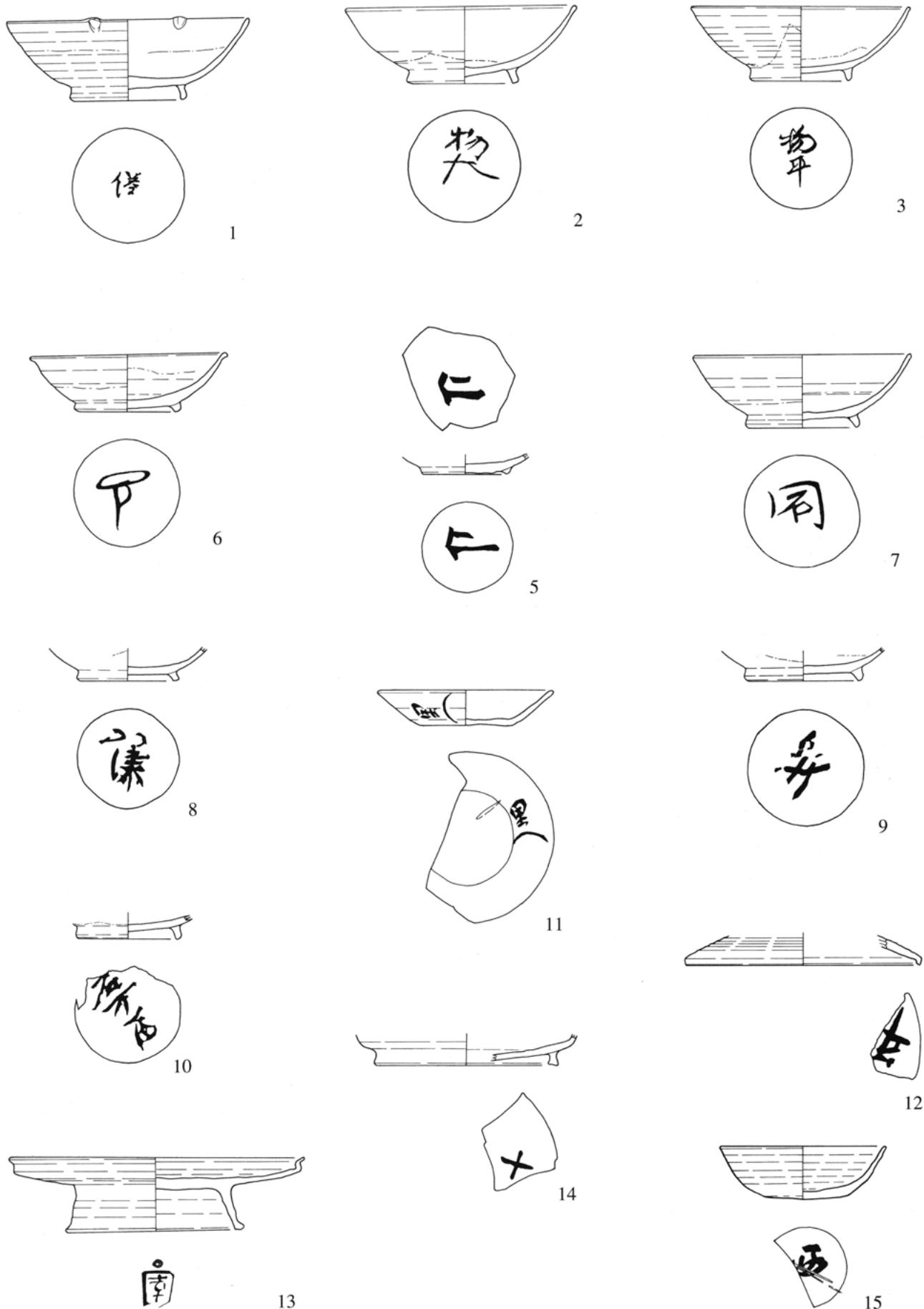
さらに、この大溝群と大毛沖遺跡で確認された旧流路の目的は何であったのだろうか。旧河道の東への退行は、大毛沖遺跡の旧流路開削に伴うものであり旧河道の水量調節と水利目的が考えられている。空撮写真(図6)の詳細を検討すると、大毛沖遺跡で確認された旧流路が、門間遺跡から今伊勢古墳群の縁を貫いていたことが観察できる。そして、大毛池田遺跡・門間沼遺跡に開削された大溝群は、自然堤防上に展開する7世紀代の居住域を等高線に沿うように貫通している。これらの大溝の開削は政治力の効いた施策である。そして、水源を河川又は旧流路に求め、灌漑等に利用したものと考えられはしないか。これら大溝開削という大土木工事は、葉栗郡の門間地区における官主導の事業が執行された事例と推察する。

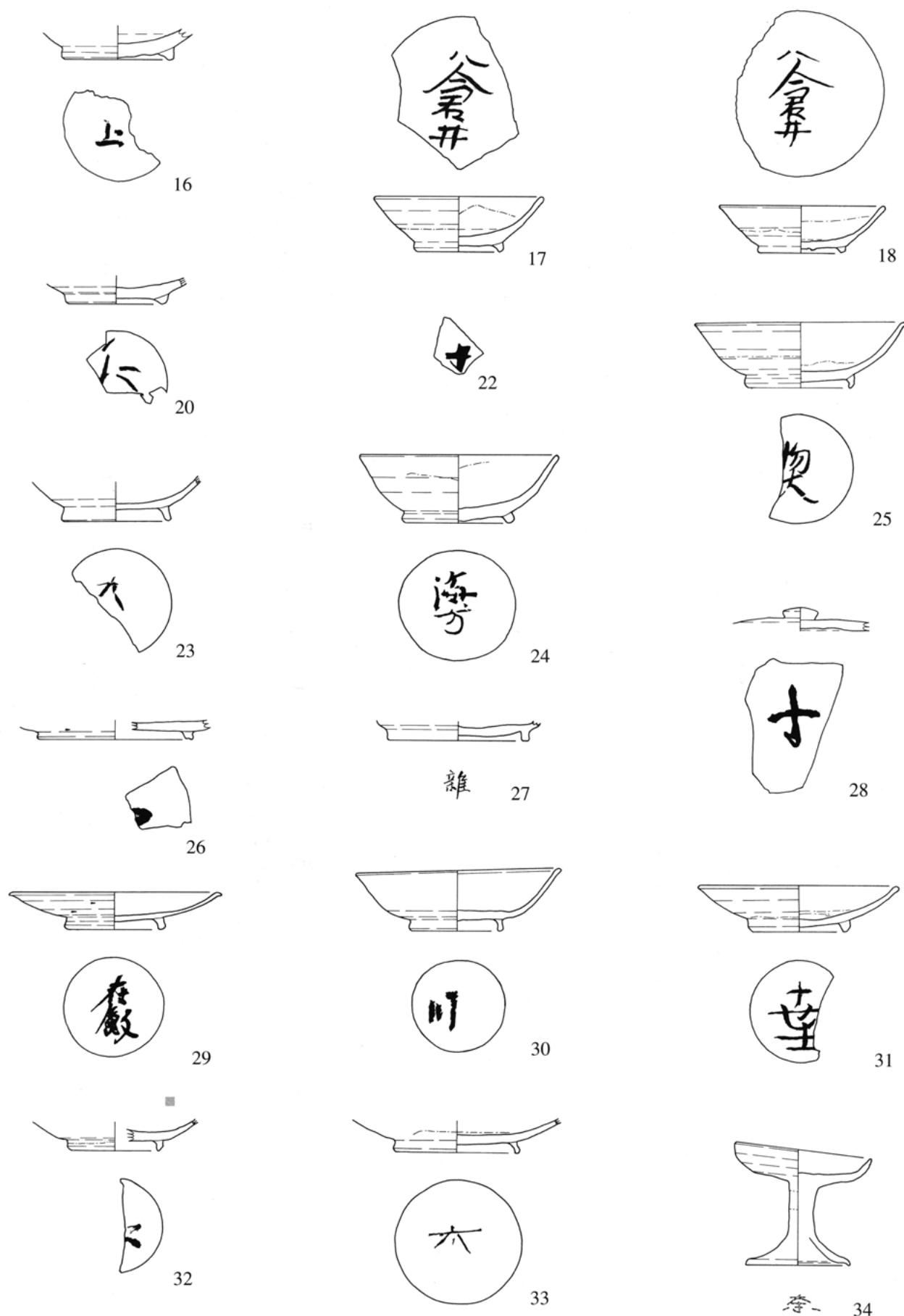
4. むすび

1994年7月に大毛池田遺跡の大溝で美濃刻印須恵器と出会ってはや5年の歳月が過ぎようとしている。以来、翌年の門間沼遺跡での刻書「山寸」、墨書「瓦」さらに、再び美濃刻印須恵器の発見と良好な文字資料に触れることができた。古代遺跡の道標とも言える文字資料、今後も続くであろう開発に伴う発掘調査によって、益々これら古代の文字資料はその様相を明らかにしてくれることだろう。

最後に、文字資料集成に対して東海学園大学岩野見司先生はじめ、一宮博物館土本典生氏、久保禎子氏には重ね重ねご理解・ご教示を頂いた。感謝の意を表す。また、所蔵遺物を調査させていただいた石刀神社の方々、一宮博物館へ遺物を提供して頂いた方々のお名前を記し謝辞とする。安藤正義、小川宣彦、木野茂、木全貢、木全修、栗本忠男、寺本光夫、森勝一(五十音順、敬称略)

*福岡 猛氏には、突き抜けているのは山ではなく、何か記号ではないかとのご教示を頂いています。





博物館所蔵墨書土器

表1 一宮市博物館／木曾川町資料館所蔵資料一覧および統計グラフ

No.	出土地	遺跡名	器種	器種	時期	墨書き位置	墨書き	産地	備考	所蔵
1	一宮市大字高田字瓦ヶ野	瓦ヶ野遺跡	灰釉陶器	輪花鉢	0-53	底部外面	僧	美濃須衛	S39. 4	一宮市博物館
2	一宮市大字高田字瓦ヶ野	瓦ヶ野遺跡	灰釉陶器	碗	0-53	底部外面	物大	美濃須衛	S39. 4	一宮市博物館
3	一宮市大字高田字瓦ヶ野	瓦ヶ野遺跡	灰釉陶器	碗	0-53	底部外面	物平	美濃須衛?	S39. 4	一宮市博物館
4	一宮市大字高田字瓦ヶ野	瓦ヶ野遺跡	灰釉陶器	碗	0-53	底部外面	?	美濃須衛?	S39. 4	一宮市博物館
5	一宮市浅井町大日比野字清瀬	清瀬遺跡	灰釉陶器	皿	H-72	底部外面	仁、仁	美濃須衛	盤穴内	一宮市博物館
6	一宮市浅井町大日比野字清瀬	清瀬遺跡	灰釉陶器	碗	E-90~O-53	底部外面	?	美濃須衛?	花押墨書き	一宮市博物館
7	一宮市浅井町大日比野字清瀬	清瀬遺跡	灰釉陶器	碗	0-53	底部外面	?	美濃須衛	一宮市博物館	
8	一宮市浅井町尾間字美濃敷	美濃敷遺跡	灰釉陶器	碗	0-53	底部外面	?有説不可	美濃須衛	文字、620201	一宮市博物館
9	一宮市浅井町尾間字美濃敷	美濃敷遺跡	灰釉陶器	碗	E-90新	底部外面	?有説不可	美濃須衛	文字?、620201	一宮市博物館
10	一宮市浅井町尾間字美濃敷	美濃敷遺跡	灰釉陶器	碗	E-90新	底部外面	石?万口	美濃須衛	620201	一宮市博物館
11	一宮市浅井町尾間字美濃敷	美濃敷遺跡	須恵器	杯A	8C後半	体部外面	黒	美濃須衛?	瓦書き有	一宮市博物館
12	一宮市今伊勢町馬若字小坪	須恵器	盤B	8C後半	体部外面	年	美濃須衛	890305	一宮市博物館	
13	一宮市大字潮部字堂裏	潮部堂裏遺跡	須恵器	盤C	8C末~9C初	体部外面	?	難扱	文字?、一宮市史中盤	一宮市博物館
14	一宮市萩原町高木字瓦瀬	須恵器	杯B	0-10~IC78	底部外面	十	難扱	611010	一宮市博物館	
15	一宮市萩原町高木字瓦瀬、高木、中島中東沖	須恵器	杯A	I-25~NN32	底部外面	西	難扱	内外面墨付增多、瓦書き有	一宮市博物館	
16	一宮市萩原町高木字瓦瀬、高木、中島中東沖	灰釉陶器	碗	H-72	底部外面	上	美濃須衛	内面墨付增多	一宮市博物館	
17	一宮市萩原町中島字東明里敷(柳ノ木)	灰釉陶器	碗	H-72	底部外面	八倉井	美濃須衛	一宮市博物館		
18	一宮市萩原町中島字東明里敷(柳ノ木)	灰釉陶器	碗	H-72	底部外面	八倉井	美濃須衛	一宮市博物館		
19	一宮市丹陽町あずら	須恵器	杯A	8C	体部外面	刀	?	一宮市史鉄鉢資料、未完員	個人蔵	
20	出土地不明(一宮市内?)	灰釉陶器	碗	H-72	底部外面	にor仁?	美濃須衛	一宮市博物館		
21	愛知郡木曾川町門間字上新田	門間遺跡	須恵器	臺類?	?	底部外面	?	880306	一宮市博物館	
22	愛知郡木曾川町門間字上沼	門間遺跡	須恵器	杯盤	?	底部外面	十	鳳彌座	570420、転用碗	一宮市博物館
23	愛知郡木曾川町門間字西出	門間遺跡	灰釉陶器	深碗	0-53新	底部外面	大口?	美濃須衛	580821	一宮市博物館
24	愛知郡木曾川町門間字郎東	門間遺跡	灰釉陶器	碗	0-53新	底部外面	海刀	820801	一宮市博物館	
25	愛知郡木曾川町門間字東部	門間遺跡	灰釉陶器	碗	E-90中~新	底部外面	物大	?	一宮市博物館	
26	愛知郡木曾川町外割田字上割	須恵器	盤B	8C後半	底部外面	?	美濃須衛	880327	一宮市博物館	
27	愛知郡木曾川町外割田字由兼	須恵器	杯B	8C末	底部外面	蝶	美濃須衛	?	一宮市博物館	
28	愛知郡木曾川町門間	門間遺跡	須恵器	盤B	8C末	体部外面	十	美濃須衛	木曾川町資料館	
29	愛知郡木曾川町門間	門間遺跡	灰釉陶器	碗	E-90	底部外面	飯	難扱	木曾川町資料館	
30	愛知郡木曾川町門間	門間遺跡	灰釉陶器	碗	E-90~O-53	底部外面	川	難扱	木曾川町資料館	
31	愛知郡木曾川町門間	門間遺跡	灰釉陶器	碗	E-90	底部外面	世口?	難扱	木曾川町資料館	
32	愛知郡木曾川町門間	門間遺跡	灰釉陶器	碗	E-90	底部外面	?	文字	木曾川町資料館	
33	愛知郡木曾川町門間	門間遺跡	灰釉陶器	皿	E-90新	底部外面	大か?	難扱or東濃	木曾川町資料館	

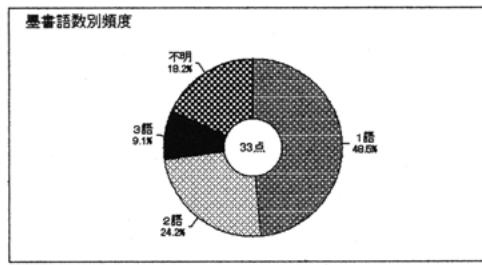
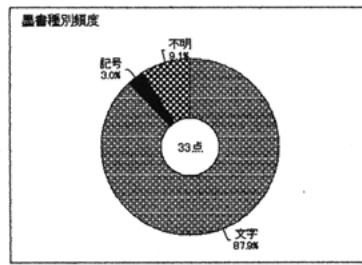
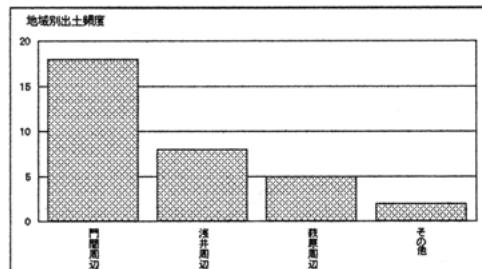
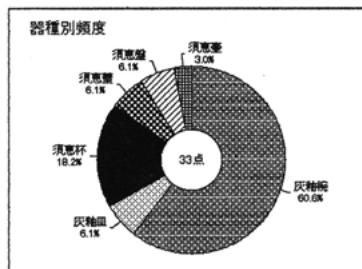


図6 濃尾平野北部の航空写真

